

# 電八倶楽部「電信八号」ケース・スタディ

東京大学大学院 経済学研究科 博士課程 生稲 史彦  
日本学術振興会 特別研究員 藤田 英樹

## 1. 「電信八号」の概要

### 電八倶楽部・電八開発倶楽部と「電信八号」

「電信八号」は石岡隆光氏が開発し、現在は任意団体「電八倶楽部」および「電八開発倶楽部」が開発を引き継いでいるメールソフトである。その機能性、完成度は非常に高く評価され、財団法人インターネット協会 (Internet Association Japan; <http://www.iajapan.org/>) が主催した、第5回フリーソフトウェア大賞(FSP'96)において入賞を果たしている。

その特徴は、電子メール・クライアントとして必要十分な機能を備えつつも、プログラム・サイズが非常に小さく、起動・動作が軽快な点にある。加えて、メールを編集するエディタの機能、メールを閲覧するビューワの機能を内蔵せず、ユーザが好きなエディタ・ビューワを利用できる点も、人気を博している理由の1つである。

現在の開発主体である電八倶楽部、電八開発倶楽部とも、「誰でも入れて、いつでも抜けられる」メーリング・リストで、それぞれの参加者数は電八倶楽部で 1000 名程度、電八開発倶楽部で 300 名程度である。両者はそれぞれ独立したメーリング・リストで、その違いは、電八開発倶楽部の方が開発活動により関わりが深いことである。安定していないバージョンである 版の配布、開発に関する技術的な情報の交換などは主に電八開発倶楽部で行われている。

現在の電信八号の延べダウンロード数は、初期バージョン(「無印」)が 58,642 件<sup>1</sup>、現在のフル・パッケージ(Sp2)が 98,962 件<sup>2</sup>である。

### 電信八号の配布形態

電信八号は、開発当初からフリーウェア<sup>3</sup>であり、現在ではフリーウェアであることに加えて、条件付きながらソースコードが公開されている。

この配布形態に関し、現在の電信八号開発における中心メンバーの1人である中村賢一郎氏は次のように述べている<sup>4</sup>。

アメリカでは、原作者による著作権放棄が可能なため、ソフトウェアを Public Domain において自由にダウンロードするようにすることができる。ただし、こうした Public Domain Software をも

---

<sup>1</sup> 2000年12月24日以降の数値、2003年3月8日現在。

<sup>2</sup> 2001年12月12日以降の数値、2003年3月8日現在。

<sup>3</sup> 石岡氏は「当初、若干の『金儲け』の意図もあったが、思ったよりシェアが取れず、後発の『Becky!』が急速にシェアを伸ばしたため『金儲け』を断念し、フリーウェアであり続けることにした」とも述べていた。

<sup>4</sup> 中村氏の以下の発言は、「『厳しすぎる』との批判がある電信八号のライセンス形態は、日本の著作権法、文化的・歴史的背景を考慮すれば、妥当なものである」という趣旨にもとづいている。

とに製品化し利益を上げたとしても、それを Public Domain に還元する義務はなく、そのソースコードも秘匿しても法律上問題がない。これではソースコードを公開し、自由にそれを改変し、再配布してもらいたいという意図を作者が持った場合に不都合であるため、著作権 (Copyright) を放棄せず、むしろそれを利用するかたち (Copyleft) で、改変済みのソースコード公開を義務づけるライセンス形態として GPL (GNU General Public License) が存在する。だが、日本の著作権や頒布権の下では、原作者による著作権放棄が不可能なため Public Domain Software 化もできないし、GPL を厳密に履行させるだけの法的根拠も存在しない。そのため、日本の著作権法、および万国著作権法に基づき、さらには日本の歴史的、文化的要素を反映して、フリーウェア<sup>5</sup>やシェアウェア<sup>6</sup>として公開・配布されるソフトウェアが出てきたと考えられる<sup>7</sup>。

ただし、ソフトウェアとともにソースコードも公開すると、ソフトウェアの系統が複数に分岐し、同一ソフトウェアをルーツ・名称に持っていながら、バージョン間で互換性がとれなくなるおそれがあり、実際そのようなソフトウェアも過去に存在した。

こうしたソフトウェアの系統の分裂は、リーダーがいなかったり、その影響力が弱かったりする場合に起こりうると考えられる。しかし電信八号の場合は、原作者の石岡氏が開発主体・開発対象を一本化することを条件に開発を移管し、さらに条件付きでソースコードを公開したので、その轍を踏むことはなかった。

また、もう1人の主要な開発メンバーである福井貴弘氏は次のように述べている。コンピュータとソフトウェアの社会における1つの強固な文化である UNIX 文化は、「ないものは作る」「作ったものは全体還元する」という考え方を持っている。福井氏はこの文化の1つの具現化として、電信八号の開発に当たっているようである。

## 電信八号の詳細

電信八号のソフトウェアとしての規模は、原作者の石岡氏が開発していた時代から5万行程度であり、現在でも10万行を上回ってはいないという。

また、電信八号は冒頭で述べたようにエディタを自由に選ぶことができる(エディタ・フリーな)メールソフトである。これは原作者の石岡氏が当初から意図していたことであり(「メールの編集

---

<sup>5</sup> フリーウェアに関する原作者の石岡氏の意見はシンプルで、フリーウェアとは無料のソフトウェアであると考えている。石岡氏の場合は、自作フリーウェアを再配布(FTPサーバへのアップロードやCD-ROMへの収録)する際には通知してもらおうことにしているが、「ただ単にどういうところで使われているのか知りたいから」とであるという。

<sup>6</sup> また、もう1人の主要な開発メンバーである福井貴弘氏はシェアウェアについて次のように述べている。シェアウェアとは、その名が示すとおり、元来は「モノ(ソフトウェア)を共有しよう」という意識で始まっており、それを継続使用するための支払いも元来は「寄付(donation)」であった。現在でも継続使用にあたって任意のチャリティへの寄付を求める careware、葉書の郵送を求める cardware、何でもいれ何かと交換を求める swapware など多様な寄付の形態が存在している。

<sup>7</sup> 中村氏は、「日本のフリーウェアはアメリカにおける User-Supported Software、すなわち、ユーザの自発的サポート、自発的寄付 (donation) という思想に影響を受けて成立したが、自発的寄付では開発およびサポートを支えるに足るだけの資金などが集まらないため、シェアウェアというカテゴリーのソフトウェアが成立したのではないかと述べている。

機能は当初から外部のソフトウェアに任せることにしていた)、それに応じて熱心にエディタを開発した人達の要望に呼応するかたちで 1995、1996 年頃に DDE を作成し、公開済みである。また、その後コマンド・オプションも公開したため、現在ではエディタを中心に少なからぬ数のソフトウェアが電信八号と連携して動作するようになっている。電信八号と連携する外部ソフトウェアの概要は表 1 のようになっているが、この他にも、標準メニューへのメニュー項目の追加、ログ拡張、時刻合わせ、PGP(暗号化)プラグイン、自動アップデート(例えば、中村氏作成の「最新八号」)などが提供されている<sup>8</sup>。

表 1 電信八号連携ソフトウェアの代表例<sup>9</sup>

用途	名称	作者	備考
エディタ	ペン猫	山本和隆	他 4 点
ビューワ	電ラブ-電信八号らぶらぶビューワ	山田智史	他 4 点
カスタマイズ	電信八号拡張メニュー	山田智史	他 2 点
コーディング	UUDeview for Windows	Frank Pilhofer & Michael Newcomb	他 3 点
通信	SHOWPC for Windows	KAWA & 【なかま】	他 3 点
テンプレート	電信八号テンプレートエディタ	じゅんくん	
フィルタ	Def	ラッタッタ信玄	
編集	Creole	井上亜晴	他 1 点
メール操作	返信八号	山田智史	他 8 点
その他	DenZWrap	大和田哲	他 5 点

3 月 1 日現在。公式サイトに掲載されている連携ソフトウェアを集計したもの。用途の分類は筆者による。

このような経緯を経て、DDE とコマンド・オプションが公開されているが、電信八号の拡張性・利便性をさらに高めるため、現在よりいっそうの情報公開や改良が検討されているという。具体的には、「フォルダ構造の公開」(青木茂氏)や「インストーラなどを追加してもっと環境設定を容易にし、初心者向けの敷居を下げること」(岩井雅治氏)などが議題に上がっているという。ただし、これらはいずれも検討中の課題であり、今後実現されるかどうかは確定していない。

## 開発環境

電信八号の開発言語には、Visual C++が一貫して使われている。

具体的な開発環境は、後述するように多数の開発者・テストが参加する開発形態をとっているため、各人各様である。しかし、C++のコンパイラがあればそれ以外に特別な開発環境は必要なく、ごく普通のコンピュータを利用して開発に参加できる。

<sup>8</sup> 公開されたインタフェースによらずに電信八号の機能を利用するようなソフトウェアも存在している。山田智史氏作成の「電極 Z 号化計画」がその代表である。

<sup>9</sup> 表 1 に掲載した連携ソフトウェアは、ほんの一部にすぎない。サーチ・エンジンで検索してみると、これら以外にも膨大な数の電信八号のための外部アプリケーションが見つかる。

## 2 . 開発活動の開始・継続

### 原作者石岡氏による開発

原作者である石岡氏<sup>10</sup>が電信八号を開発しようと思った動機は、「『わかりやすいメールソフト』を自分が使いたいこと」と若干の「金儲け」であったという。

1994 年、IJ が個人向けインターネット接続サービスを提供し始め、石岡氏もそれに加入した。だが、電子メールを使うに当たって困惑したことがあった。というのも、当時 Windows 用に提供されていたメールソフトは、「英語版 Eudora」「Al-Mail」「WinBiff」しかなく、どれも非常に使いにくく感じたからである<sup>11</sup>。それでも、しばらくは Eudora のコードを変換して使っていたが、1995 年春頃になると、「自分で作っちゃえ」「自分が使いやすい Windows 用メールソフトを作ろう」と考えるようになった。

開発に当たっては、UNIX 環境で広く使用されていたメールソフトである MH(Mail Handler)を意識し、平日の夜と土日を開発活動に当てて、開発開始から 3 ヶ月程度経った 1995 年夏にはソフトウェアが使える状態になったという。さらに開発開始から約半年後の 1995 年秋には、ソフトウェアが安定してきたと感じ、Asahi ネットのソフトウェア掲示板に電信八号を投稿した。また、それ以前から、所属していた会社の同じ部署の同僚には自らの手で配布していたという。

こうした社内での配布活動から得られた反応や、Asahi ネットで「センスがよい」と賞賛を受けたことに調子づいて、どんどん改良を加えていったという。すなわち、石岡氏自身の願望や会社の同僚の反応、メールによるソフトウェアへの反応<sup>12</sup>を受け入れ、それらに応えるために開発を継続していった。

石岡氏によれば、当時は「素直に言われることを聞いていた」状況にあり、その背景には、ユーザから寄せられる要望・期待に応えたいという気持ちがあったという。石岡氏の言葉を借りれば、「できますか？」と問われると、「できるわい」と思って応えてしまう状況だったという。この時期の石岡氏は、「ユーザの期待に応えたい」という思いを抱くとともに、公開して満足感を得ること、配布サイトでの評価、雑誌などの評価記事、ダウンロード数の多さなどを通じて、うれしさや誇らしい気持ちを感じており、それが励みになっていた。とくに代表的な配布サイト「窓の杜」でダウンロード数がトップになったときは非常に嬉しかったという。

このように高いモチベーションに支えられ、当時は 1 ヶ月に複数回のバージョン・アップを行っていた。つまり、自分自身の願望、ユーザの反応を元にコードを記述し、コンパイルができれば即時公開していた。ただし、デバッグやテストも行わずに公開することに問題を感じたため、1996 年夏頃からは、リリース版と開発室版( 版)を分けて公開するようになった。その後、Windows 95 が発売されたことや、1997 年頃から本格的にインターネットが立ち上がったことにより、電信八号の

---

<sup>10</sup> 石岡氏の専門は自然言語処理、テキスト・マイニングである。以前は機械翻訳などの開発に携わっていたが、現在は日本語解析プログラムおよびその周辺技術の開発に従事している。

<sup>11</sup> 石岡氏によれば「ヘルプを読む気もしない」ほど使いにくかったという。

<sup>12</sup> ユーザの中には、組み込み可能な APOP や MD5 のソースコードをメールに添付してくる人もあったという。

ユーザも増えていった<sup>13</sup>。

しかしながら、1998年頃には徐々にバージョン・アップの頻度が下がっていく。

ユーザから寄せられる要望の数に変化はなく、石岡氏もそれに応えようとしたが、ある時期からは「自分で使うには十分」と感じるようになった。同時にメールソフトとしては後発の「Becky!」が急速にユーザ数を増やして、当初抱いていた「電信八号で金儲け」というささやかな希望もかなえられる見込みが少なくなった。これらのことから、石岡氏が開発に寄せる情熱は低下してしまった。そのため、2ヶ月に一度程度、自分自身が納得できるような要望や深刻なバグには対処していたものの、それ以前のように積極的にソフトウェアのバージョンを上げることはなくなってしまった。

その結果、以前と変わらないペースで寄せられるユーザからの要望に十分に答えられなくなった。この状況は、電信八号を改良するための要望を受け付けながらそれに答えられない「ソースコード死蔵」の状況であり、石岡氏にはそのことが苦痛に感じられるようになった。当時は、電八倶楽部のメーリング・リストには参加し続けていたものの、そのメールやユーザから寄せられる要望のメールを読むことすらしない「事実上の停止状態」だったという。

しかし、1999年7月のある日、石岡氏はふと思い立ち、電八倶楽部のホームページを訪問して、その熱心さ、熱心なユーザと熱心な運営者の存在を感じ取った。その熱心さに対し、石岡氏は「要望が多数あり、熱心なユーザも多くいるのに、ソースコードを死蔵しているのは悪いことだ」と考え、ソースコード公開<sup>14</sup>を決断したという。

その後、電信八号に関するメーリング・リスト「電八倶楽部」で積極的な活動を行っていた中村氏に連絡を取り、1999年7月13日に条件付き<sup>15</sup>でソースコードの公開に踏み切ることになった。

## 電八倶楽部への開発移管

現在の電八開発倶楽部・電八倶楽部の主要メンバーである中村氏、伊澤正之氏によれば、山田智史氏作成の「電極Z号化計画」のように、ソースコードが公開される以前から電信八号の改良ソフトは存在していたという。また、ユーザ側に広く「電信八号をもっとよくしたい」という欲求があり、「電信八号を無理矢理よくするメーリング・リスト」なども立ち上がっていた。

しかし、1999年7月に石岡氏より実際にソースコードが条件付きで公開されると、それまでユーザの情報交換の場として存在していた電八倶楽部は、それに対応して開発を引き継ぐために、対応

---

<sup>13</sup> この時期に行われた、電信八号を16bitベースのアプリケーション(現「電信八号16bit版」)から32bitベースのアプリケーションに転換する作業にはかなり「手こずった」記憶があるという。また、コンパイラを変えることにより、それまで顕在化していなかったバグが顕在化する現象にも見舞われたという。

<sup>14</sup> ソースコードの公開に関しては、それ以前に川瀬裕氏などから要望があったが、「恥ずかしいコード(石岡氏)」であると思っていたため、公開に踏み切れなかったという。ただし、ユーザ側から見れば「感動的なコード(青木茂氏)」「遊び心のあるすばらしいコード(中村氏)」に感じられたという。

<sup>15</sup> ソースコード公開の条件とは、(1)配布用サーバの確保、(2)電信八号を複数の系統に分裂させないこと、であった。現在この条件を満たして原作者の石岡氏の他にソースコードを保有しているのは、電八開発倶楽部と「のびのび情報教育研究会」、その他1団体である。

の準備をすることが必要となった<sup>16</sup>。

石岡氏がソースコード公開に当たって提示した条件を満たすため、配布用サーバをどのように確保するか、といったことについて電八倶楽部内で議論が行われた。この議論は電八倶楽部全体というより、後に発足する電八開発倶楽部のメンバーが既に中心になっていた。

その結果、サーバの確保に目処をつけた後、もう一つの石岡氏の条件である「電信八号を複数の系統に分裂させないこと」を守るため、「公式ビルダ<sup>17</sup>」を任命して、公式ビルダがバージョン管理を行うことが決定された。そして、斉藤氏によって公式ビルダの役割が明文化された。その役割とは、ソースコード管理、ビルド管理、サイト管理であった。さらに斉藤氏は自らが公式ビルダに就任しようとするが、諸般の事情により断念せざるを得なかった。そこで、1998年8月21日、機材購入を機に中村氏が公式ビルダに立候補し、倶楽部の信任を経て公式ビルダに就任した。

### 各開発者の開発への参加経緯

公式ビルダの1人である中村氏は、以前から自作ソフト、移植ソフトを多数開発している人物である。

もう1人の公式ビルダである福井氏は、1995年頃からパソコンを使うようになったが、Windows 95も16bit版の環境も「嫌いで仕方なかった」ため、その当時からWindows NT 3.1を使用していた。電信八号に関しても当初は16bit版を使用していたが、後に32bit版に移行した。

福井氏は1996年頃からインターネットを利用するようになった。この当時は定番のメールソフトと呼べるものがなかったため、Internet Magazineの付録CDに入っていた電信八号をメインのメールソフトにしようとも考えたが、最初のうちはWebブラウザのNetscape Navigatorのメール機能を利用していた。

しかし、後にメール・データを変換、利用することを考えた場合、メール・データがテキスト・ファイルになっている電信八号の方が好都合であると考えた。さらに、福井氏は何をするにもエディタを使い、しかも使い慣れないエディタは絶対に使いたくないというタイプであるため、エディタが自由に選べる電信八号が非常に良いと判断して本格的に使用するようになり、1996年12月には電八倶楽部にも参加するようになった。ただし、電八倶楽部への参加は購読のみ(ROM: Read Only Member)であり、あまり積極的な参加とは言い難かった。さらに、1998年頃には、電信八号の使用をやめようかと考えるようになっていた。それは、バージョンが上がらず不便さが解消されなかったからだという。

このように考えていた福井氏が、再び電信八号に深くコミットするようになったのは、1999年のソースコード公開が契機である。福井氏は、以前から他のソフトウェアの開発などでプログラミングの経験を持っており、かつ「オープンソース」という考え方に賛同していたため、1999年7月に

---

<sup>16</sup> この時期の電八倶楽部に関し、そのメンバーの1人である本田善久氏は次のように述べている。「電八倶楽部は元来コーザの集まりであり、それがソースコードを預けられて多少混乱している観があった」。また、電八倶楽部の他のメンバーも、この当時、既存の電八倶楽部と開発継続のために新設した電八開発倶楽部の軋轢があったこと、ソースコードが条件付きで公開されたことに不満を持つ人々が存在し、彼らが電八倶楽部から離れていったことを認めていた。

<sup>17</sup> 「公式ビルダ」とは、版の開発に携わる人のことである。

ソースコードが公開され、誰でも開発に参加できるようになったことを知ると、その開発を担う電八開発倶楽部に設立当初から参加する<sup>18</sup>。

しかし、電八開発倶楽部の設立初期は、開発が思うように進まなかった。すなわち、アップデートのためのパッチを誰もまとめておらず、ほぼ1年間にわたってパッチが溜まって、それがバイナリ版に反映されない状況が続き、電八開発倶楽部内でフラストレーションが高まっていた<sup>19</sup>。

これを受けて福井氏は、「ユーザにフィードバックできるなら」と考え、自ら公式ビルダに立候補する。福井氏は、「パッチだけがあるという状況は、個人的にビルドができる人には、改良されて不具合がなくなった電信八号が使えるが、それができない普通の人には使えないという、不公平で不条理な状況だ」と考え、同時に「(よりよい電信八号を)誰でも使えるようにしたい、みんなに使って欲しい」「みんなの役に立ちたい」と思い、公式ビルダに立候補したのだという。加えて、メーリング・リストを通じて大変な状況にあることが推察された中村氏をサポートし、自分がビルドを引き受けることで中村氏にパッチ作成をして欲しい、という考えもあったという。

福井氏の立候補は所定の手続きを経て信任され、同氏は2000年6月15日に公式ビルダに就任した。就任当初の福井氏の方針は、「溜まったパッチを消化しよう」というものであった。そこで、バグ修正のみだった電八開発倶楽部の最初のビルド(2000年3月15日: V321.2b6-stable)にはタッチせず、その次の公式ビルド(V321.2a71)に注力して、溜まっていたパッチの取り込みによる機能向上、不具合修正を果たした。この当時の1、2ヶ月は「電信八号に触るのが仕事」のような状況であり、版<sup>20</sup>の公開も非常に早い「週刊電八状態」であったという<sup>21</sup>。

また現在、電八倶楽部において連絡・渉外係を担当している伊澤正之氏は、会社の業務において工場の生産管理システムや受発注などの基幹系業務に携わっていたため、コンピュータの利用はしていたという。ただし、こうした業務ではメインフレームやUNIXが使用されていたそうである。

このようなコンピュータ歴を持つ伊澤氏がパソコンに触れるようになったのは、やはり会社の業務がきっかけである。1995年夏に会社がホームページを開設し、顧客からの問い合わせのメールを受け付けるようになったため、システム部門の担当者としてそのパソコンを管理する立場に伊澤氏が就いた。同時に、顧客からの問い合わせのメールにも応える必要が生じたため、1996年春頃、遅くとも1996年夏頃には電信八号を使うようになったという。

顧客からの問い合わせメールへの対応に伊澤氏が電信八号を選択したのは、それまで使用していた商用のインターネット用ソフトウェアでは、複数のメール・アカウントを使用することができず、業務上受付アドレスを複数化したいという当時の要望に応えられなかったためであった。つまり、共用ダイヤルアップ接続のパソコン上で、複数のメール・アカウントを切り替えられるソフトウェアとして電信八号を使用することにした。伊澤氏はメール・ソフトとして電信八号に決定するまでに、このような機能を持つメール・ソフトをネット上で検索したが、当時該当するフリーソフ

---

<sup>18</sup> 当時の心境について福井氏は「ソースコードにさわれるなら参加せざるを得ない」と思ったと述べている。

<sup>19</sup> こうした状況を反映して、公式ビルダの中村氏が「辞職する」と言い出すまでになっていた。

<sup>20</sup> この時期から、特に不安定なバージョンを 版として電八開発倶楽部内限定で公開することが通例になったという。

<sup>21</sup> 公式ビルダになったことにより、時間的余裕がなくなり、自分でパッチを作成することは少なくなってしまったという。

トは電信八号のみだったという。加えて、電信八号が MIME や Base64 などの当時最新の RFC<sup>22</sup> 準拠であったことも採用の理由であった。

こうして電信八号のユーザとなった伊澤氏が電八倶楽部に参加したのは、1997 年 9 月頃であった。顧客から寄せられるメールの中に、変則的で読めない形式のもの<sup>23</sup>が少なからず混じるようになったため、これに対処する方法、情報を得たいと思い、電八倶楽部に参加したという。

ついで、中村氏や福井氏のように公式ビルダではないが、電八倶楽部の主要メンバーやプラグイン・ソフトの開発者、あるいはユーザ兼テスタとして電信八号の開発に参加している人々について紹介する。

外部ソフトのビューワである「電ラブ」や、Perl を利用して返信フォーマットを作る「返信八号」「電信八号++」などの電信八号の「ヘルパー・アプリ(お助けソフト)」の作者である山田智史氏は、自身がフリーウェア作者である。現在は開発に参加しておらず、電信八号のユーザではないが、石岡氏が開発をしていた時期には、上記のようなヘルパー・アプリを開発、提供し、1996 年頃から 2000 年頃までは電信八号のユーザであった。

山田氏は 1996 年当時 NEC のソフトウェア開発子会社に勤務していた。当時はやはり、メールソフトとして定番と呼べるものがなく、その中でも AL-Mail や「WeMail」を使ってみたが、特別使いやすいさを感じなかった。そこで直接の面識は無かったものの、同じ NEC に勤務していた石岡氏が電信八号を開発・公開していることを知り、またその説明に「MH を意識した」とあったので、電信八号を使ってみた。さらに、プログラミング技術を活かして電信八号のヘルパー・アプリを開発・提供するようになったという。

岩井雅治氏もまた、現在はコンピュータ環境が Linux ベースに移行したため電信八号を使用していないが、1999 年から 2000 年初め頃までユーザであり、現在も電八倶楽部のメーリング・リストに参加している人物である。

岩井氏は Outlook Express からの乗換で電信八号を使用し始めた。電信八号を選んだ理由は、他にメールソフトが見当たらなかったこと、無料で使用できること、エディタが選べたことであったという。また、学生時代から Windows と UNIX の環境に触れていたため、電信八号の環境設定やユーザ・インターフェースには抵抗感がなかったという。

電信八号について岩井氏は、「無料であり、かつシンプルな機能美を目指しているように思われる。『電信八号の方向性や環境設定、ユーザ・インターフェースに抵抗のある人は、他のメールソフトを使えばよい』、という考え方があるのではないかと述べていた。

なお、同氏の電八倶楽部への参加は、「ユーザであるので、そのメーリング・リスト、つまり電八倶楽部が存在するのなら参加しよう」という心情からであり、現在は電信八号のユーザでないこともあって、メールの購読が中心であるという。

寺島裕貴氏は、現在電八倶楽部に参加しているメンバーである。寺島氏は、1997 年頃から父のインターネット環境、パソコンを利用し始め、Internet Magazine の付録で電信八号を知るが、当時は

---

<sup>22</sup> Request for Commnet [s]。インターネットに関する技術仕様。

<sup>23</sup> これらの変則的なメールは、マイクロソフト社の Outlook Express や Instant Messenger から寄せられたものが多かったという。



その価値が分からなかったので Netscape を利用していたという。

その後、パソコンにのめり込み、自分でプログラミングをするようになって自分の環境構築にこだわりを持つようになり、その一環としてメール・データの保存形式が重要であることに気づいた。このメール・データの保存形式という観点から見ると、AL-Mail や Netscape では不満があり、他方、電信八号の価値を再発見したので、「1997年当時とは状況が変わっているな」と思いつつも、それを利用するようになったという。寺島氏は、「自分がそうであったように、電信八号の価値、良さが分かるためにはある程度のパソコン、インターネットに関する知識が必要だろう」と述べていた。

なお、寺島氏の電八倶楽部への参加は、学校関係のメーリング・リストに参加し、その繋がりでメーリング・リスト「is-uno」に参加、さらにその繋がりで電八倶楽部に参加するようになったという。

本田善久氏は、本来の仕事においてパンチカード時代からメインフレームのコンピュータを使用している人物である。そのため、電子メールもメインフレーム上で IBM の BITNET を使用している。

本田氏もダウン・サイジングの流れに従い、パソコンも併用するようになったが、当初はパソコンをクライアントにしてメインフレームを利用していた。しかし、やはりその使用方法では面倒なため、パソコンとインターネットを利用したメールソフトを探し、無料でかつ、メインフレームの電子メール同様にフォルダ構造、ヘッダ情報を隠さない電信八号を使用するようになった。

本田氏が電八倶楽部に参加するようになったのは、1997年末～1998年初頭ごろに「RFC 準拠であるのであるならば、大文字と小文字を区別せずに処理すべきだ」とメールで発言したことがきっかけであった。本田氏の電八倶楽部への参加状況は、基本的に1ユーザであり、メールの購読と投稿をするにとどまっておろ、開発には全く参加していないという。

和田和子氏は自身も認める初心者ユーザである。伊澤氏に誘われてメーリング・リスト is-uno に参加し、そこで電信八号の存在を知った。現在は電信八号を受信メールのスクリーニングのために使用している。電信八号は、メール受信時に POP サーバ上のメールのヘッダ部分だけを取得して表示する機能が備わっている。そのため、受信しないメールをサーバ上から削除したり、必要なメールだけを選んで受信するという和田氏のような利用方法が可能なのである。

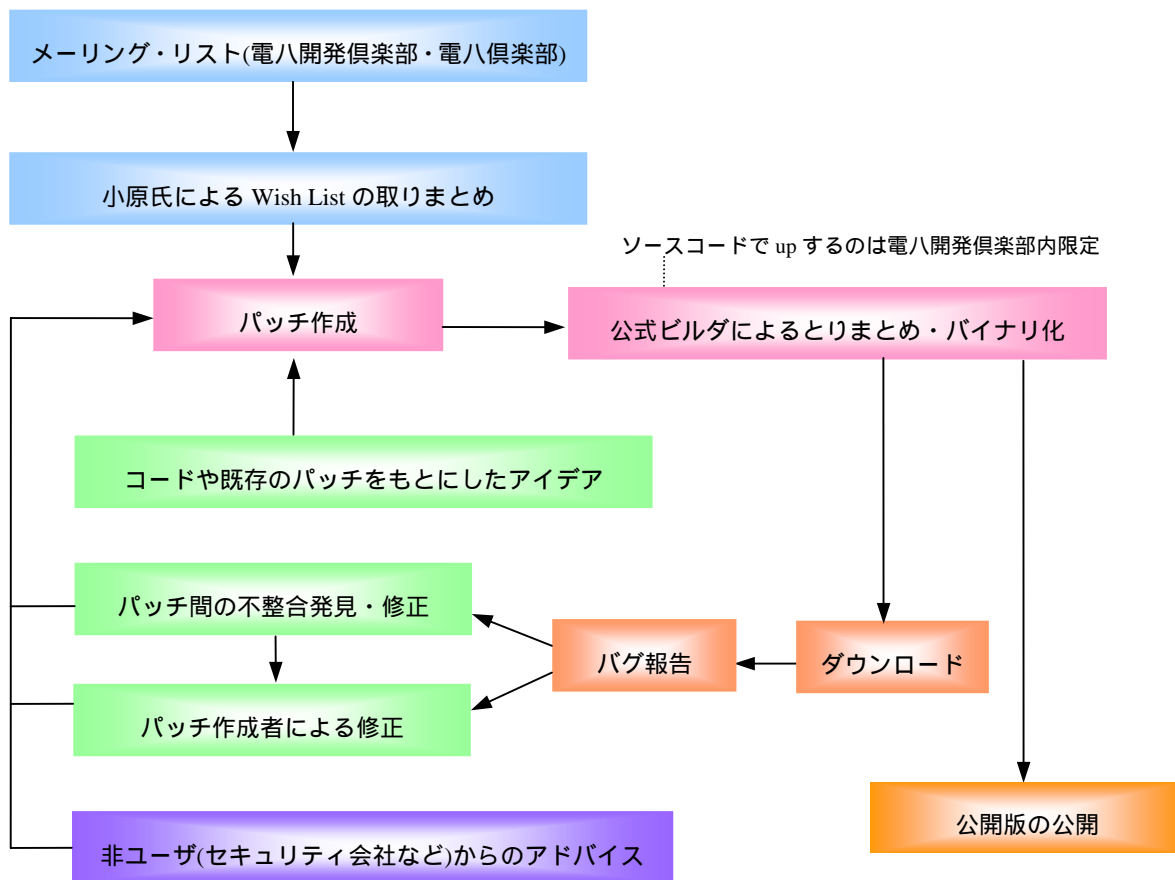
電信八号のメーリング・リスト電八倶楽部への参加は、「尊敬できる人が多いな」と思ったからだという。和田氏にとって同メーリング・リストは本来の仕事にも役立つため、頻繁に目を通しているという。また、自分自身が初心者であることを踏まえて、初心者が電信八号を利用するとどのようになるのかを、メーリング・リストに報告したこともあるという。

### 3 . 開発活動の詳細

#### バージョン・アップ・プロセスの概要

現在の電信八号のバージョン・アップ・プロセスは、パッチ作成、公式ビルダによるとりまとめ・バイナリ化(ビルド)、配布およびバグ報告、新たなパッチ作成、というサイクルが基本になっている。バージョン・アップに関わるさまざまな活動の流れを図示したものが図1である。

図1 電信八号のバージョン・アップ・プロセス<sup>24</sup>



パッチ作成の際に主に参照され、ビルドの際にもパッチを取り込む優先度を判断するために参照される役割を果たすのが、公式ビルダの1人である小原良仁氏がとりまとめる Wish List である。

Wish List は、ユーザから電八倶楽部・電八開発倶楽部に投稿された修正や機能追加の要望をとりまとめて、日本語で記述したものである。このリストは、あくまで修正や機能追加の要望をプールしたものであり、それが開発グループの誰かにパッチ作成の義務を負わせるものではないとされている。言い換えれば、公式ビルダを含めた開発グループの誰かが、寄せられた修正や機能追加の要望に共感すれば、それをプログラムとして実現するためのパッチが作成されることになるが、そうでない要望は未処理のまま Wish List に残り続けることになる。

このようにパッチ作成の1つの端緒は、Wish List に上げられた要望を消化することである。加えて、ユーザ自身が使っている中で生じた問題を解決するためにパッチを作成したり、石岡氏のコードを参照してそれを技術的に改良するためにパッチが作成されることもある。さらには、RFC が提示する規格に沿うためにパッチが作成されたり、セキュリティ・ホールを探す企業からの報告に基づいてパッチが作成されることもある。

こうした様々な経緯、背景をもって作成されたパッチを統合し、バイナリ形式に変換してサーバ

<sup>24</sup> 修正・改良されたバージョンの正確な名称と公開先については、<http://denshin8.esprix.net/patches.html#develop> を参照されたい。

にアップするのが公式ビルダである中村氏と福井氏である。新しいパッチを統合し、バージョン・アップされた電信八号は、動作が不安定になる可能性がある場合、すなわちデータ消失の危険が伴う場合には 版として、その危険性がなく安全だと思われる場合には 版としてサーバにアップされ、 版は電八開発倶楽部登録者が、 版は電八倶楽部登録者がダウンロード可能になる。

電八開発倶楽部及び電八倶楽部の登録者は 版や 版をダウンロードし、使用してみて、バグ報告やバグを修正するためのパッチを提出する。それらを受けて、再度パッチをとりまとめ、不具合の修正が行われて、一般向けの(誰でもダウンロードできる)公開版がリリースされる。

### 現在のバージョン・アップ状況

中村氏、伊澤氏によれば、「電信八号の開発スピード、バージョン・アップのペースは非常に速い」という。実際、更新履歴に基づいて、バージョン・アップのペースを把握すると、表2のようになり、そのペースの速いことが見て取れる。

表2 電信八号のバージョン・アップ履歴と頻度

	公開日	一日あたり問題 解決数	1バージョンあたり 開発日数	1バージョンあたり 問題解決数	バージョン数	日数	問題数
Ver.1	1995.7.14～	0.196	20.067	3.933	15	301	59
Ver.32.1	1996.5.10～	0.158	46.906	7.396	53	2486	392
全体		0.162	40.985	6.632	68	2787	451

3月1日現在。電信八号のパッケージに同梱されているリリース・ノートと、公式サイト「電信八号-移管後の歩み」をもとに筆者が集計。

各バージョン・アップで解決された問題数は、リリース・ノートに記載されていないものもあったので、実際にはこれより格段に多いはずである。

すでに述べたように、電八倶楽部としての最初の公式ビルドこそ、開発移管時の混乱と未処理のパッチの膨大さのためビルドの作成・公開が遅れたが、福井氏の協力もあって大量の未処理パッチを吸収して最初のビルドを公開することに成功し、その後は順調にバージョン・アップを重ねている。

バージョン・アップの目安であるビルドは、毎週提出されるいくつかのパッチを受け入れる形で行われる。福井氏が自らの作業と認識した電八 FAQ 集の移管作業終了後、ビルドは中村氏と福井氏がほぼ交代で行ってきた<sup>25</sup>。公式ビルダが2人いることにより、最新のビルドの作成・公開は1週間に1度のペースで行うとしても、それぞれの公式ビルダの作業は隔週で行えばよいことになり、作業が軽減されるという<sup>26</sup>。したがって、その公開ペースは早い場合には3日、遅くとも6ヶ月毎

<sup>25</sup> 公式ビルド作成を交代で行うことに関して福井氏は、「こうした役割分担は自然とできあがったもの」で、「自然の成り行きに任せた結果、どちらが電信八号のバイナリ化を行うかを明確化しなかった」と述べていた。さらに、「電八倶楽部・電八開発倶楽部はボランティアな組織なので、仕事を割り当てるようなことはしたくない」「できる人ができることをするのが理想」とも述べていた。

<sup>26</sup> 「公式ビルダ2人制」について中村氏と伊澤氏は、「分裂の危険性もあるが、助けられること、相互に補完しあえるメリットが多い」と述べている。

にビルドが行われてきた。

最近では、提出されるパッチが減ったこともあってビルドが滞りがちだが、それでも平均してほぼ1ヶ月に1回のペースでビルドが続けられ、公開版が公開されている<sup>27</sup>。ただし、中村氏が多忙なため福井氏がビルドを行うことが多くなっているという。

公式ビルドの具体的な作業自体は、機械的な作業であるという。そのため、提出済みのパッチの数を勘案した上で作業に取りかかり、ほぼ半日~1日で履歴テキストの更新までを済ませることが可能<sup>28</sup>だという。

なお、公式ビルドの作成に当たっての留意点、ポイントは2人の公式ビルダの間で微妙に異なっている。

中村氏にとって電信八号は、RFC完全準拠をベースに追加的要素のあるメールソフトである。そのため、電信八号本体とプラグインとの切り分けに留意し、電信八号本体が上記のようなメールソフトであり続けるように心がけているという。また、バージョン・アップの積み重ねによって内部的には大分変化しているものの、外観・外見は当初の電信八号を維持している。つまり、RFC完全準拠、外部仕様の固定化<sup>29</sup>、外観・外見の維持をしつつ、ソフトウェア内部の挙動、機能を可能な限り向上させることが、中村氏が公式ビルド作成に当たって留意している点である<sup>30</sup>。

一方、福井氏の公式ビルド作成に当たっての留意点は、「他人に使ってもらうもの」なので、致命的なバグが存在しないようにすることだという。また、パッチのとりまとめを極力「機械的に」行い、福井氏のプログラムとしての独自性が電信八号に表れないよう心がけているという<sup>31</sup>。

## 電信八号のバージョン・アップにおけるユーザの役割

初期の電信八号のバージョン・アップにおけるユーザの役割について、原作者の石岡氏は、作者が想定しなかったような使い方を見だし、使用していたことが印象的だったと述べている。具体的には、電信八号のデータ形式が単純なS-JISテキストであることを活かして電信八号を他のソフトウェアで操作したり、プログラム・サイズの小ささを活かしてフロッピー・ディスクに携帯した

---

<sup>27</sup> 電信八号の開発はあくまで「趣味」のため、公式ビルドの公開が遅れがちになる傾向もあるという。そのため、公式ビルドの公開時期を予め決めておくこともある(例えば「クリスマス・ビルド」など)。

<sup>28</sup> このことを利用して、「数字遊び」が好きな福井氏はキリのいい日、節目の日ビルドを作成し、タイムスタンプを印象的なものにするようにしている。福井氏は「ビルドした日付がファイルのタイムスタンプに残るとうれしい」と述べている。

<sup>29</sup> より平易に言えば、「同じソフトウェアが電信八号と連携して機能すること」である。

<sup>30</sup> こうした中村氏の方針に満足している人もいるが、不満を持っている人もいるという。その不満は、「電信八号は何も変わっていないじゃないか」というものである。だが、中村氏は、「『何か変わった』と明らかに分かるようなバージョン・アップ、すなわちメジャー・バージョン・アップは『一体、電信八号とはどのようなソフトウェアなのか』という問題を生じさせるし、フル・スクラッチでコードを書き直したものは電信八号と呼ぶべきではないだろう」と述べている。

<sup>31</sup> この他に、中村氏と伊澤氏によれば、「中村氏は完璧主義、福井氏はアバウト=多少不完全でも公開し問題が生じたら修正すればいいだろう」という違いがあるという。

りするユーザがいたという。また、作者が考えるアピールポイントとユーザが評価するポイントが異なっていることも印象的だったという。

現在のバージョン・アップに対するユーザの貢献に関しては、中村氏、伊澤氏、青木氏が異口同音に、「電信八号の開発において、ユーザすなわちメーリング・リスト参加者の中に優秀なデバugg(バグを出し、報告してくれる人材)がいることが大きい」と述べていた。ユーザの中には、修正項目のすべてをテストしたり、バグの再現条件を克明に記したレポートを提出したりする人もいるという。

ただし、電八倶楽部・電八開発倶楽部の開発者、ユーザ間の交流はメーリング・リストがほぼすべてと言ってよく、オフラインでの交流は皆無に等しいという。中村氏などによれば「一度集まってみたい」という欲求はあるが、その機会がないとのことだ。

この点に関して岩井氏は、「オンラインで十分な交流があるので、オフラインでの交流の必要性は高くない」と述べていた。岩井氏は、オフラインの交流が皆無に等しいのは、電信八号の開発が本業ではないことと、ミーティングよりもメール、メーリング・リストの方が効率的<sup>32</sup>であることによると述べていた<sup>33</sup>。

## 4 . 開発組織

### 電八倶楽部・電八開発倶楽部の成立経緯

電信八号の開発初期の 1995 年末から 1996 年初めに、石岡氏は自ら掲示板を設置し、ユーザからの同じような質問に答えなくていいようにしていた。だが、それとは別にユーザ側で独自にメーリング・リストが立ち上げられ、このメーリング・リストが電信八号に関する要望の提示・受付の窓口が変わっていった。このユーザ独自のメーリング・リストの延長線上に現在の電八倶楽部、電八開発倶楽部がある。

より詳細な電八倶楽部の設立経緯を述べると、元来はユーザの情報交換サイトとして 1995 年に川瀬裕氏がホームページを立ち上げた。1996 年の時点では約 40 人が参加し、設立初期から原作者の石岡氏に要望を取りまとめて提出することを行っていた。

その後、石岡氏とユーザとの接点が基本的に電八倶楽部に一本化されるようになり、石岡氏も電八倶楽部において開発室版( 版)の配布などを行うようになった。これ以降、川瀬氏と中村氏が立

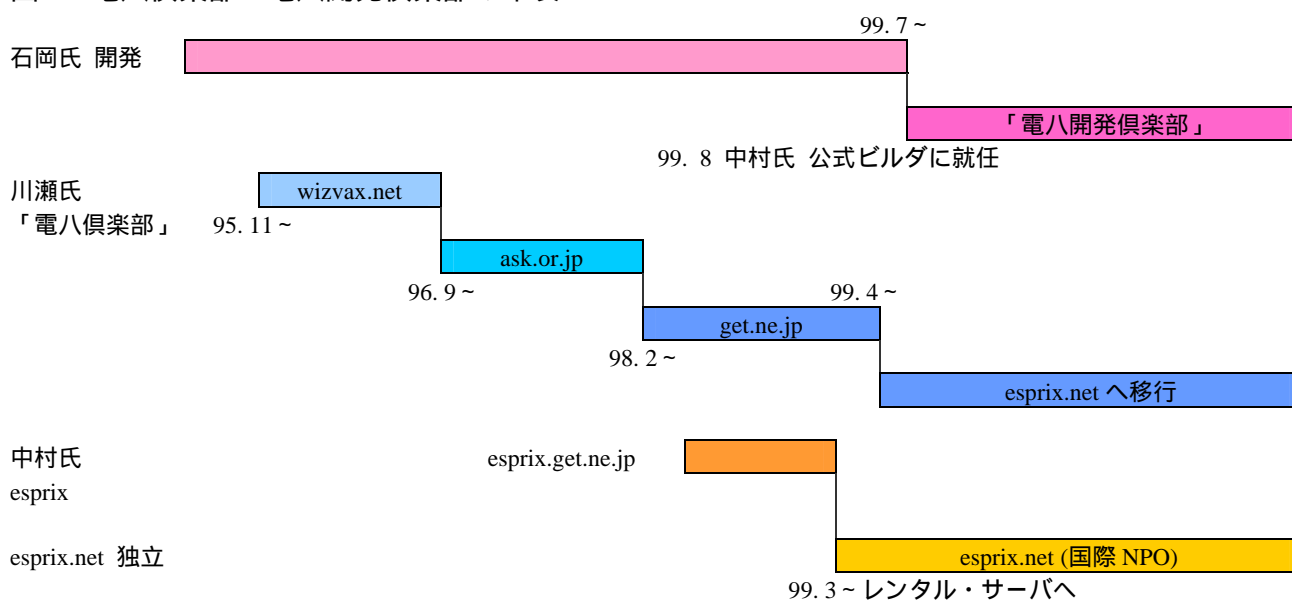
---

<sup>32</sup> ここで「効率的」というのは、開発者全員が参加して開催するミーティングを持ち、開発を効率化することの利点を否定しているのではなく、物理的・時間的な制約を加味すればオフラインのミーティングにはその開催自体にコストがかかりすぎるため、メールおよびメーリング・リストでの情報交換がトータルとして効率がよくなる、という意味である。

<sup>33</sup> ただし、岩井氏によると、他のメーリング・リストでオフラインの交流(オフ会)や、ソフトウェアの作者を囲むオフラインの会合は行われているという。ただし、ソフトウェア開発者同士の横の連携はそれほどなく、むしろ開発言語毎のメーリング・リストを起点にした勉強会が開かれているという。OS 別で言えば、Linux や BSD 関連で交流は盛んだが、Windows では「日本ウィンドウズ・エヌティ・ユーザ会(Japan Windows NT Users Group)」が目立った活動をしている程度である、という差があるという。さらに Linux や BSD では企業が啓蒙目的で行うセミナーも開かれているという。

ち上げた現在のメーリング・リストの基盤である esprix.net に至るまで、ホスト・サーバなどの移転が幾たびも行われたが、電八倶楽部は常にユーザの情報交換の場としての機能を維持し続けて現在に至っている。さらに、1999年7月にソースコードが公開されたことに伴い、それまでの電八倶楽部とは別個のメーリング・リストとして電八開発倶楽部が立ち上げられ、現在の開発、配布、情報交換の体制ができあがった。

図2 電八倶楽部・電八開発倶楽部の年表<sup>34</sup>



### 現在の開発組織

現在、電八倶楽部の総参加者は1,000人、メーリング・リストに積極的に発言する活動的な人は常時40~50人いるだろうとのことである。他方、開発により深くコミットする電八開発倶楽部は、総参加者300人、活動的な人は常時4~5人である。ただし、いずれのメーリング・リストにおいても活動的な人は一部を除き入れ替わっている可能性があるという。

電信八号の開発活動、すなわちソフトウェアのコーディング、検証・テストは、これら電八倶楽部、電八開発倶楽部全体で行われているが、強いて、より開発に深く関わっている人物を特定すると、それは4人の公式ビルダと3人の連絡・渉外担当者である。

公式ビルダは、パッチのとりまとめを行うプライマリ・ビルダの中村氏と福井氏、Wish List担当の小原氏、最終公式ビルダとして裁定者の役割を果たす川瀬氏で構成されている。また、連絡・渉外係として伊澤氏が、中村氏の負荷を軽減するために2000年5月に立候補して信任され、現在ではさらに小川修氏と近田守也氏が加わって3人で連絡・渉外業務を行っている(2002年4月より)<sup>3536</sup>。

<sup>34</sup> 1999年にホスト・サーバの移転と組織の整備が行われたのは、それまで使用していた get.ne.jp が売却される懸念が生じたためである。それにとまないと、get.ne.jp にあったメーリング・リストも esprix.net に移管された。

<sup>35</sup> なお、4名の公式ビルダと連絡・渉外係の業務連絡のためのメーリング・リストとして den8-contacts が稼働している。

<sup>36</sup> このケース作成後、さかの氏、青木氏、寺島氏が連絡係になっている。3氏の役割分担は、さかの氏が渉外係相当、青木氏は見本誌保管係相当となっている。信任の日付等は、インターネットメーラー電信八号オフィシャルサイト

開発組織の紹介の最後として、電信八号の開発組織においてリーダーに該当する人物はいるのかどうか述べておく。この点について中村氏は、電信八号の開発組織にリーダーはおらず、「宙ぶらりん」「不安定な状況」になっていると述べていた。さらにそうしたリーダー不在の状況は、一長一短であり、メジャー・バージョン・アップ、例えば「電信八号 2」の開発などに踏み切れない点においてリーダーの不在は欠点だが、Linux のように最初の開発者がリーダーとして開発を押し進める状況と比較した場合に、必ずしも悪い点ばかりではない、よい面もあると述べていた。ただし、リーダー、サブリーダーといった役割の人物はいないものの、公式ビルダに「技術的拒否権」すなわち、不具合を生じさせる可能性があるパッチをビルドに統合しないことを決定する権利があることを指摘していた<sup>37</sup>。

他方、もう 1 人のプライマリ・ビルダである福井氏は、電信八号のコミュニティは自然発生的、リーダー不在の特殊なコミュニティであると述べていた。しかし、筆者達が原作者の石岡氏のコードの存在そのものや、ソースコードの公開条件などがリーダーに代わる役割を果たしているのではないかと尋ねたところ、「石岡氏の存在も大きいですが、それを熱心に説き、公式ビルドに反映させてきた中村氏の役割が非常に大きいだろう」と述べていた<sup>38</sup>。

## 5 . その他

### 電信八号の開発・使用が継続されている理由

電信八号の開発・使用が継続されている理由、つまり、電信八号のソフトウェアとしての魅力をインタビュー参加者の意見にしたがってまとめると以下ようになる。

まず、中村氏、伊澤氏、青木氏は、データがわかりやすく配置されていてその挙動が見えること、データのほとんどがテキスト・ファイルで構成されており、メール本体もテキスト形式なので管理とリカバリーが容易であること、エディタ・フリー<sup>39</sup>であること、UNIX 上で使い慣れた MH、emacs 上で動作する MH-e に近い操作感が Windows 上で実現されていること、などを挙げている。

さらに中村氏は、電信八号が「原作者である石岡氏の人柄がにじみ出ているメールソフト」「職人の道具のようなソフトウェア」であると述べていた。また、プロセッサが低性能でも軽快に動くこと、「プログラムはソースコードで公開することが普通」という UNIX 文化と親和性が高いことも魅力であるとしていた。

電信八号と UNIX および UNIX 文化との親和性に関しては、山田氏も「UNIX フレーバー」とい

---

(<http://denshin8.esprix.net/>) を参照のこと。

<sup>37</sup> このような開発組織、開発リーダー不在の状況を、中村氏は「電信八号の開発の進め方は BSD をモデルにしている」という言葉でまとめている。

<sup>38</sup> この福井氏の発言を解釈すれば、電信八号の開発組織の組織文化を醸成したのが石岡氏であり、それを守り育てている、すなわち管理している中村氏が現在のリーダーである、と言えるだろう。

<sup>39</sup> 伊澤氏によれば、電信八号のこの特性を利用して、連携するビューワやエディタと組み合わせ、電信八号をパソコン上で常駐させておいて、ビューワやエディタから電信八号を操作する、という使い方もありうるという。

う言葉で同様の評価をしていた<sup>40</sup>。具体的には、エディタ・フリーであること、1 メールが1つのテキスト・ファイルであること、動作の仕方などが電信八号とUNIXの共通点であると述べていた。

山田氏が挙げたその他の電信八号の魅力は、プログラマからの観点として、電信八号の設定ファイルなどがテキスト形式で記述されているため、「いじり易い」「いじくり倒しやすい」点にあると述べていた。

他方、福井氏は電信八号のユーザ・インターフェースは16bit時代のWindows 3.1に近く、むしろその背後の動作が「UNIXライク」であると感じていた。

福井氏自身はUNIXの使用経験はないが、DOSの使用経験はあり、そのため「動作が透けて見える」電信八号のようなソフトウェアが魅力的なのだという。加えて、前述のようにエディタが好き、すなわち可能な限りエディタを使いたいのので、エディタ・フリーの電信八号がメールソフトとして好都合なのだという。

これらの発言をまとめて福井氏は、電信八号の魅力として、「皮の薄さ」「動作が透けて見えること」「ゴテゴテしたユーザ・インターフェースをかぶせていないこと」、動作のシンプルさ、エディタ・フリーであること、バックアップの容易さ、の4点を挙げていた<sup>41</sup>。

他の意見としては、岩井氏が無料であることを挙げていた。加えて岩井氏は、エディタ・フリーであること、1通のメール・データが1つのテキスト・ファイルになっていることも挙げていた。

同様に寺島氏も無料であることとエディタ・フリーであること、1通のメール・データが1つのテキスト・ファイルになっていることを魅力として挙げていた。また寺島氏も福井氏と同様に「皮の薄い」ソフトウェアであることが電信八号の魅力の1つであると述べていた。

これら各氏とやや異なった観点から電信八号の魅力を述べていたのは、本田氏と和田氏である。

まず本田氏は、電信八号の魅力を「わかりやすさ」という言葉で表現していた。その意味するところは、例えば、ログ・ウィンドウがあるのでサーバとのやりとりがどうなっているのかわかり、エラーの原因が特定しやすい、ということである。

ただし本田氏は、他の人に電信八号を薦めることには慎重であるという。というのも、多くの方はメール・ソフトとはOutlookのようなものであるという先入観を持っており、また、電信八号はある程度のコンピュータ・スキルがあれば使いやすいが、そうでなければ使えないメール・ソフトだからだという。

次に和田氏は、電信八号の魅力をその開発姿勢に対して感じていた。具体的には、視覚障害者へのフォローを非常に意識していることや、いろんな人達に優しいソフトウェアである、そうあるうとしていることが魅力的だと述べていた。

#### メーリング・リストへの参加継続の動機づけ

公式ビルダの中村氏は、自分が開発をし続ける理由を、「電信八号の公式ビルドを維持することは自己実現」であり、「どうしても止めることができないこと」と述べていた。また、「フ

---

<sup>40</sup> 電信八号と同時期にNECグループの社員によって開発されたメールソフトとしてWeMailがあったが、UNIXフレージャーだったため、山田氏は電信八号を使うようになったという。

<sup>41</sup> なお、中村氏が挙げた動作の軽快さが電信八号の魅力の1つであることには、福井氏も同意していた。



リーソフトは自己実現の発露の1つである」とも述べていた。

より具体的には、電信八号、電八倶楽部に愛着を持つ人達のために開発をしており、そうした人々、例えば国内のユーザや外国のユーザなどからメールを受け取って「世界中から応援を受けている感じ」を持ち、自分自身でもユーザ達に貢献することができている、役に立っているという実感を得ているという。さらに、「作ること、使うこと、メーリング・リストに参加すること自体に誇りを感じて」おり、「自分の生き甲斐として」1日3時間ほどの開発作業を続けているという。

もう1人の公式ビルダである福井氏は、当初は大変そうな状況にあった中村氏のサポート、バイナリ版に反映されないパッチの氾濫という状況の收拾のために開発に参加し始めたという。「自分が公式ビルダになれば、みんなに最新のバイナリ版を届けてあげられる」というのが当時の率直な心境であった。

ただし、福井氏は自分自身を「求められれば何でもやるタイプ」と思っており、正直な気持ちとしては、「公式ビルダになるよりパッチ作成を続けている方がよかった」「プライベート・ビルドを自分で作っていた方が楽だった」とも述べている。

しかし、公式ビルダ就任後、福井氏の心境に変化が生じたようであり、「公式ビルダになってみてプライベート・ビルドよりも大変だが、自分が作ったものが『公式』として認められることに喜びを感じるようになった」とし、さらに中村氏同様、公式ビルダの役割を果たすことで溜まっているパッチをユーザに届けられるという意味でみんなの役に立っていることを実感しているという。また、現在も公式ビルダとして開発に参加し続けている理由については、「自分で使っているモノは自分でメンテナンスしたい」「自己満足」であると述べていた<sup>42</sup>。さらに、「たとえ公式ビルダが死んだとしても、(電信八号に関する)コミュニティが生き続けることが理想」だとも述べていた。

連絡・渉外係を担当の伊澤氏は、電八倶楽部に参加したことにより、自身に欠けていたインターネットでのメールに関する知識を豊富に得ることができたと感じ、同時に電八倶楽部のようなコミュニティのあり方、それを運営している川瀬氏の活動にも惹かれるものがあったという。こうした電八倶楽部への興味に加え、中村氏が多忙に見えたこと、自分が「お世話になった」コミュニティに何らかの形で役に立ちたいという気持ち、それ以前に発生したメーリング・リスト上での問題には接続環境の貧弱さなどのため問題処理に参加できずその処理過程を見ているにしかなかったが、連絡・渉外係に立候補する段階では「今度は参加できそう」と思われたこと、などがあったため、連絡・渉外係に立候補したのだという。また伊澤氏は、自らの参加理由を、電信八号が「1997年から使い続けていて『無いと困る道具』だから」「電八倶楽部・電八開発倶楽部というコミュニティの動きを見ていることも面白い」とも述べていた。

以下、各ユーザの参加理由を順に見ていくことにしよう。

青木氏<sup>43</sup>の参加理由は、「現実逃避」であるという。また、困った人を助けてあげることによって満足感が得られることもその参加理由に挙げていた。

---

<sup>42</sup> これらの理由に加えて「自分で公式ビルドを作っていると、自分が改善・改良したい点を組み込みやすいという実利的なメリットもある」と述べていた。

<sup>43</sup> 青木氏は1995、1996年から電信八号を使用し始めた。当時の雰囲気は、「たとえ問題が生じるとしても最新のソフトウェアを使いたいという欲求が強かった」と述べている。

岩井氏の場合、現在は電信八号というソフトウェアを使ってはいないが、それでも電八倶楽部に参加し続けているのは、面白いから、勉強になることがあるからだという。

寺島氏は、電八倶楽部は「居心地がよい」メーリング・リストであり、「優しさを感じる。何でもそこまで優しくなれるかなと思うときすらある」ものだという。電八倶楽部の雰囲気<sup>44</sup>、とくにその優しさは、他の技術系メーリング・リストがドライな感じであることと、大分異なっているという。

加えて、メールソフトを含めたコンピュータ全般に関して「道具そのものにこだわりたい」、すなわち自分でカスタマイズし、メンテナンスしたいという欲求があり、使用するソフトウェアも「その奥が見えないと気持ち悪い気がする」<sup>45</sup>のだという。そこで、電八倶楽部というメーリング・リストを通じてコンタクトをとることができ、信用できる人達だと感じられる人々が開発している電信八号を使用しているのだという。

さらに寺島氏の場合、将来的に開発に参加したいという希望を持っているので、そのための情報、とくに公開版以外の 版が手に入ることが魅力的であると述べていた。

和田氏もまた、電八倶楽部に優しさを感じている。具体的には、同じような質問に丁寧に返信を返していたり、返信が非常に早かったりすると「なぜそこまで手厚いのだろう」と思うのだという<sup>46</sup>。

また和田氏は、電八倶楽部に参加してメールを読むことにより勉強させられることがあり、同時になぜ他人のためにそこまでサポートできるのかという電八倶楽部参加者のメンタリティに知的好奇心を持っているため、電八倶楽部に参加し続けているのだという。

対照的に本田氏は、電八倶楽部に優しさは感じないという。本田氏が電八倶楽部・電八開発倶楽部に参加しているのは、ヘルパー・アプリに関する情報や 版が入手できること、自分が使うソフトウェアの開発の方向性に意見を述べる<sup>47</sup>ことができ、不具合が修正されやすいことがあるからだという。また、本来の仕事として行っている困った人を助けることを、気楽にできる場として電八倶楽部をとらえている面もあるという。

最後に、ユーザではないがヘルパー・アプリの開発者である山田氏のソフトウェア開発動機について触れておこう。山田氏によれば、「ないものは作る」の精神<sup>48</sup>がソフト開発の基本であるという。言い換えれば、「自分が使いやすいように使いたい」と思って開発をし、その追加的要素として「(他の人に)使って、喜んでもらえる嬉しい」ものだという。加えて、ソフトウェアを開発し、公開したこと自体を評価、承認してもらえることも喜びになるのだという。

---

<sup>44</sup> 電八倶楽部・電八開発倶楽部のメーリング・リストの雰囲気に関しては、福井氏が「電八倶楽部は元になったメーリング・リスト時代から、寺島氏が現在感じているのと同様だった」と述べ、山田氏も「初期の頃から温和な人が多かった」と述べていた。

<sup>45</sup> こうした心境に関しては福井氏も同意していた。福井氏の言葉を借りれば「極論すれば、他人の作ったものは使いたくない」のだという。

<sup>46</sup> こうした「優しさ」は和田氏の仕事にも参考になる点が多いという。

<sup>47</sup> ただし、本田氏自身の自らの位置づけはあくまでもユーザであり、開発に参加している意識はないという。

<sup>48</sup> これは、冒頭で紹介した福井氏の「UNIX文化」と非常に似通っている。

これらは電信八号用のヘルパー・アプリ、例えば「サクサク動くビューワとしての電ラブ」「お遊びとしての電極 Z 号化計画」にも当てはまるし、他のソフトウェア、例えば「Windows Popup Biff」などにも当てはまる。とくに、Windows 3.1 の時代にはソフトウェアが本当に少ない状況だったので、色々なものを開発したという。

しかし、現在は「自分が作らなくてもあるから...」「もっと若い人に作って欲しい」と思ってしまうため、あるいは「頭に浮かんだコードを実際にエディタに打ち込むことすら面倒になっているので」、開発をあまりしていないという。さらに、開発すること、そしてそれをサポート<sup>49</sup>することは大変なことで余裕がないとできないため、開発をあまりしていないのだという<sup>50</sup>。

---

<sup>49</sup> 山田氏は現在電八倶楽部に参加していない。参加を辞めるときには「自分のソフトを使ってくれている人に申し訳ない」という思いが生じ、かなりの思い切りが必要だったと述べている

<sup>50</sup> 山田氏は現在、Web 系のシステム構築を手がける会社を経営している。SOHO になったことにより、会社に勤務していた頃に比べ時間的余裕がなくなり、フリーウェアやシェアウェアを開発したくてもできない状況だという。